

第二部

私がシャアの元を離れてから、もう何年経つのだろう……。

私の名はアルテイシア・マイネ。かつてハマーン・カーンという名で呼ばれた女だ。

私がジュドーとの戦いにおいて生き延びたのは、出撃前に切っておいた筈の脱出装置が働いた事と、その空間にシャアが救出に来てくれたお陰だった。

その後、私は彼の元で身体と心のリハビリを行うと共に、彼と、彼の元へ合流したナナイと共に三人で倒錯した性行為を連日行っていた。

その行為は、普通の人から見れば目を覆うばかりの内容だったかも知れない。軽蔑するのは一向に構わない。だがそうする事でしか安らぎを得ることが出来ない人間……私達のような人間がいる事だけでも判って欲しいと思う。

ニュータイプになる事が、必ずしも幸せだとは限らないのだから……。

私は、私の中にシャアの子供を授かったと判明した後、私は『この子をシャアの元に置いておく訳にはいかない』と思うようになっていった。

ジオンの血という柵の中でこの子を生きさせるといふ事は、生まれた時から鎖を付けるようなものだからだ。この子が自らその道を歩みたいならともかく、私はシャアの後を継いで時代を切り開いていく

のは、ジオンの血ではなくジュドーに代表される様な次世代の子供達だと思っっているからだ。

そしてしばらくした頃、私は彼へその旨と理由を告げた。シヤアもナナイも激しく反対したのだが、私の決心が強い事を知ると、二人共最後には首を縦に振るしか無かった。

とは言え、一般市民としての生活でハマーン・カーンの名前を使う訳にはいかないので、戦争で行方不明となった人の戸籍を売買している組織から、割と年齢が近い女性「アルテイシア・マイネ」という女性の戸籍を買った。その人に決めた理由は、単純に「アルテイシア」という名前が気に入ったからである。

資金は彼女名義の口座にシヤアが当座の生活費を振り込み、後は闇口座に預けてある資産を運用するという事で喰い繋ごうと思っていた。

やがて私は、移住先のサイド6で、お産を迎えた。初産だったのでかなり大変だったが、生まれてきた子供と対面した瞬間、私は無意識に涙を流していた。

私の、長年の夢が遂に叶ったのだ。

子供の名前は、ハリー・マイネと名付けた。目元がシヤアに似た男の子だ。

その際、私は長年自分のトレードマークだったセイラ義姉さん似の髪型を若干カーリーヘアにし、静かに第二の人生を歩み始めた。小さいながらも、今までとは違う幸せで満ち足りた生活を……。

ある日、ハリーを託児所へ預けて、久しぶりにゆっくりとした時間を過ごしていた私の元に、一人の訪問者がやって来た。

私は連邦の捜査官かと思ひ（とは言え、サイド6で行動するのは重大な違反行為なのだ……）緊張しながらモニターを覗いたのだが、そこに映った女性の顔を見た瞬間、私の表情が見る見る内に笑顔へと変わった。

ドアを開けると、彼女は軽く会釈をして帽子を取った。シャアとそっくりのブロンドの髪がとても素敵に見えた。

私は、彼女の事は写真でしか知らないが、以前シャアの恋人と思い込んで嫉妬心からその髪型にした事もあった。そう、セイラ・マスが私に会いに来てくれたのだ。

彼女は帽子をテーブルに置くと、満面の笑顔で話し始めた。

「貴方がアルテイシア・マイネさんね。初めまして。シャア・アズナブルの妹……セイラ……セイラ・マスです」

「……こちらこそ……アルテイシア・マイネです。お写真では何度も拝見してるのですが、実際には初めてなので、ちよつと緊張してます……」

心臓の鼓動が心なしに高鳴っている。

私の憧れであり、一目会いたいとずっと思っていた女性が、目の前にいるのだ。冷静にしてろという方が無理であろう。

やがて私達は応接室に移動してソファーに向かい合わせで座った。

「ふふっ、そんなに緊張しなくてもいいのよ。私はそんな大層な人間じゃ無いし……」

「そんな事……。私にとってお義姉さんはとっても憧れの人なんですもの。でも、よくここがお判りになりましたね」

「兄に教えてもらったのよ。アルテイシア……いえ、ハマーンと言った方がよろしいかしら？それに身内なのだから私に敬語を使わなくてもよくてよ」

「はい。お義姉さんの前で『アルテイシア』という名前で呼ばれるのはどうも気が引けてたし、どうしようかと思ってきました」

「でも、良い名前でしょう？私もその名前は好きなのよね。でも、セイラでいる時の方が長くなったし、ジョン・ダイクンの娘だと言われるのも嫌だし……ね」

「お父様の事が嫌いなのですか？」

「そんな事は無いけど……それを利用するのも、されるのも嫌なだけ……。貴方もそうだからこそ、ここへ移り住んだのでしょうか？」

セイラの言葉に、私は無言で首を縦に振った。

「そう言えば、息子さん……ハリーは？」

「今日は施設に預ける日なんです……夕方になれば帰って来るけど……」

「そうなんだ……。兄の子供ってどんな子かなあ……。って期待したんだけど……。ちよつとガツカリだわ」

「これからの予定は……？」

「何も無いわよ。貴方に会うのが目的だったから……。もつとも明日には地球に戻らなきゃならないんだけど……。船出るかしら……？」

「後で問い合わせてみます。それにもし宜しければ、今晚家に泊まっていけます？」

「それは私としては願ったりなんだけど……。本当にいいの？」

「ええ、ハリーも喜ぶと思うし……」

「そうね。じゃ、お言葉に甘えさせて頂くわ」

「じゃ、私、紅茶入れてきますね……」

私がそう言つて席を立とうとした時、セイラが意外な事を言った。

「そう言えばハマーン……。貴方……。兄の事……。今でも愛してるの？」

私は即答で答えた。

「え？ええ……。心の底から愛しています。私にとって彼は全てだから……」

セイラの表情が微妙に変わった。

「ふくん。じゃあ貴方は兄の、あの異常な性癖も受け入れたんだ？」

「えっ？そ……。それは……」

「隠さなくてもいいわよ。貴方と兄との関係は知ってるから……」

「でも、それをやってたのはハリーを生む前の話だし……」

「女性としての喜びは忘れちゃった？」

「うん。シャアともしばらく会って無いし、今は毎日の生活に追われてそれ所じゃなかったの……では……ちよつと失礼……」

私は半ば強引に会話を切ると、いそいそと台所へ向かった。これ以上話すと私の中で深い眠りについでいる淫乱で変態な血が騒ぎ出しそうなのだ。

それを理性で必死に押さえながら、私は紅茶を入れて応接室に戻った。

セイラは、その間テレビを付けて、シャアが率いるネオ・ジオンのニュースをボーッと眺めていた。私は彼女の前に紅茶を差し出すと、ストレートのまま無言で口を付けた。その間、ニュースの声だけが響き渡る時間が長く続いた。

そうしていると、セイラがおもむろに話しかけた。

「ハマーン……？」

「はい。何でしょう？」

「貴方だからこそ……聞いて欲しい事があるんだけど……いいかしら？」

「私でお役立て出来る事なら……」

セイラは首を軽く横へ振った後に言った。

「うん。そう言う事じゃ無くて……本当に聞いてくれるだけでいいんだけど……」

「は……はい？」

私がそう答えると、再び長い沈黙の時間が訪れた。やがて、セイラはニュースを見ながらその重い口を開いた。

「私と兄は小さい頃に離ればなれに暮らす事になった……それは知ってるわよね」

「ええ。シヤアは余り話したがらないですけど……」

「一応表向きはザビ家が色々と画策したとか言われてるんだけど……本当はね……」

セイラは一瞬ためらいの表情を浮かべたかと重うと、意を決して口を開いた。

「私と兄の間に……肉体関係があった事が原因なのよ」

衝撃的な告白に、私は危うく紅茶をこぼしそうになった。それを見つつセイラは話を続けた。

「驚いた？」

「は……はい。予想してなかったから……少し……」

「実の兄と妹が何て事を！……って思ってくれてもいいし、私を汚らわしい女と蔑んでも構わなくてよ」

「そっ、そんな事……ありません。そうなったからには、当然それなりの理由があると思うし……」

「兄は父が急に死んで……身内が私と兄の二人だけになってしまっ……辛くて仕方がなかったんだと思う。だって、私がそうだったから……。そんな誰も頼れず誰も信頼出来ない私達が、心の安らぎを求めて肉体関係を結ぶまでには……そんなに時間がかからなかったのよ……」

「……」

「そして、そんな異常な関係はどんどんエスカレートして行って、時間さえあれば肌を重ね合っていた

わ。そして……更に刺激を求めて見様見真似でSMプレイの真似事のような事までやってたわね。そういう異常な精神状態の時のプレイって、エスカレートしていくのよね。そういう精神状態って判って頂けるかしら？」

「ええ……私も体験してますから……良く判る……」

私はダイクン家の人間が変態だと思った理由がようやく判った。幼少の頃の異常な性行為が原点だったのだ。

セイラは更に話を続けた。

「そしてある日、執事の一人が私の身体に縄で縛った跡があるのを見付けて、あつと言う間に屋敷中が大騒ぎになって……。幸いな事にセックスの現場を見られた訳じゃないし、私達は何一つ話さなかったから子供のいたずらという事で落ち着いたんだけど、それがきっかけとなって私達は離ればなれに暮らすことになってしまったの……。その時、お互いの身元引受人を必死になって探してくれたのは、あのデギン公という話よ」

「……」

「……で、兄は私と別れる時『私達を強引に引き裂いたザビ家に復讐してやる』って言ったのよね」「それって……余りにも勝手過ぎる話では……」

「そう、本当に自分勝手に自己中心的な兄だと思うわ。でもそうなってしまった『本当の理由』は言えないでしょ？だから父親を殺された事を理由にしてるんじゃないかと思うわ。だって父は政治活動ばかりしてて家庭を顧みない人だったらしいから、兄は死ぬ時までずっと嫌ってたみたいだから……」

私は思わず頭を押さえた。シヤアは独善的で独りよがりで自分勝手な男だとは知っていたが、まさかザビ家への復讐がそんな事から始まっていたとは……。

それに比べれば、以前私がザビ家への復讐云々と言っていた事が可愛く見えた。

余りの内容に、私が一体何を答えたらいいか悩んでいると、セイラはこう言うのだった。

「お酒……あるかしら……？」

「ジンやらウオッカの類なら……」

「貴方……ずいぶん強いお酒が好きなのね。それでいいわ……お願い。こんな話……とても正気では話せそうもないから……」

私は無言で立ち上がるとウオッカとグラスを用意した。軽く乾杯をして後、一気にそれを飲むセイラ。

多分その事は今まで誰にも話せずに、ずっと胸の奥にしまい込んでいたのだろう。

だがそうやって来たからこそ、セイラの心の靄は今まで晴れなかったのだ。

*

*

*

「私がジオンから離れた後サイド7に移住してホワイトベース……貴方達の呼び方で言う『木馬』に乗っていたのは御存知かしら？」

「はい。シヤアに聞いて知ってるわ」

「私はそこで『金髪さん』と蔑まれて、何人もの男性を相手にしてただけど……そんな中でも私をとて心配してくれた男がいたのよね」

「それって……もしかしてアムロ・レイの事ですか？」

私は咄嗟に口走ってしまった。

「そうだけど……どうして判ったの？」

「え？ただ何となく……かなあ……？」

私は酒を飲んで誤魔化した。

「まあ、いいわ。で、アムロはフラウ・ボウってガールフレンドがいたんだけど……私と関係を持ったのが彼女にばれて……」

「大喧嘩になった？」

セイラは首を横に振った。

「ううん。フラウは何も言わなかったし、私を責める事もしなかったわ。たぶん彼が自分の元へ戻って来ると思ってたのよね。でも、アムロが……私の身体に溺れちゃったのよ……彼にとっては余程体の相性が良かったのかもしれないわ」

「……」

「で、私も相手をしている内に、だんだんプレイ内容がハードになってきて……でも、アムロはそれを好きな訳でも無いんだろうけど、素直に実践していったわ」

「例えば？」

「連続オナニー寸止め3時間とか、飲尿とか、股間を延々と舐めさせるとか……鞭打ちとかもやったわ。その時は余りの激しさに彼ったら最後は失神しちゃったけど……」

私はその時の状況を頭の中に浮かべた。いくら合意の上の行為とは言え、少しだけアムロに同情した。

「お義姉さんは……アムロの事……どう思ってたんです？」

「私？……そうねえ。好き……だったかな？」

「そんな事をして……ですか？」

「好きだからこそ色々責めたいのよ。あの苦しがる表情がたまらなくいいのよねえ……思い出すだけでゾクゾクしちゃうわ」

「お義姉さんはサドツ気が多いんですね」

「アムロにだけなんだけどね。でも、彼はジオンの別な女性に惹かれたらしくて、急に私の体を求めなくなっていたわ」

「たぶんそれは……シヤアの愛人だったララア・スン様だと……思う」

「ああ、そんな名前だったわ」

「ニュータイプ同士引かれ合ったのかしら？」

「さあ……それは当人同士しか判らないわね。彼、結局私には詳しい事話さなかったし……体を重ねた仲だったのに……悲しかったなあ……」

私は少し複雑な気持ちでそれを聞いていた。そうしていた所セイラが興味深そうな目をしながら言った。

「ハマーン。貴方……アムロの事になったら、やけに熱心に聞き始めたわね？」

「私が……ですか？気のせいだと思います……」

「そうかしら。兄とどっちが好み？」

「そ……それはもちろんシヤア以外に考えられないです。だってアムロ・レイとは会った事無いですし……」

その言葉にセイラはニヤツと笑ってこう言い放った。

「あら？私はこのサイド6内でアムロと会ったって兄に聞いたんだけど……気のせいかしら……ねえ？」
本当に、兄妹揃って人を責める言い方が好きな一族だと私は思った。こう言われてはもう誤魔化す事は出来ない。

「隠すつもりは無かったのですが……会ったというか……一人でしてる所を見付かったというか……」

「見付かった？露出プレイでもしてたの？」

「はい……公園で……その……」

私は顔を真っ赤にしながら頷いた。大胆な事はするのだが、それを告白するのはやはり恥ずかしい。

「ホント、変態さんなのね。ハマーンは。で、その後どうしたの？」

「トイレで私の排泄姿を見て貰って……その……成り行きで肉体関係を……」

「彼……優しかった？」

「ええ、とつても……。それに行為が終わった後『もし妊娠したら責任取るから連絡してくれ』とまで言ってくれましたし……何度もキスをしてくれたわ。私はあの時、シヤアと疎遠になってたし心がズタズタで誰かに甘えたかったから、時間の許す限り何度も彼と……」

「ふふつ、彼、貴方がネオ・ジオンの指導者だったって知らなかったのかしら？」

「ええ、その時はまだ素性を言っただけで無かったし……結局妊娠もしなかったので大事にもならなかったか

「……」

そう答えた所、セイラは再びグラスを手にして軽く口に含みながら言った。

「彼のそんな所が……私にとって重荷だったのよね……」

「えっ？何？」

「ん？こっちの話……。でも、話したく無かったと思うけど……よくアムロとの事……話してくれたわね。ありがとう。ハマーン」

ニコツと笑うセイラ。

「そんな……お義姉さんこそ、言いたくない事話してくれたし……おあいこです」

「では、お互いこの秘密は誰にも話さないって事で……いいかしら？貴方もそうだと思うけど、私も兄との関係を世間にバラされたら、ジオンの威厳なんて吹き飛んでしまうしね」

「はい。この話は地獄の底まで持っていきます」

「天国じゃないのね」

「ええ。そこまで凶太い人間じゃ無いです。例えどんな目的があっても、私がやった行為は立場が違えば決して許される事では無いし……」

「今度……兄がそれをやるみたいなのよね……」

「……？シヤアが一体何をやるというのですか！？」

私がそう訪ねると、セイラはスツと立ち上がり私の隣りに座った。かなり酔ってはいたが、まだ正気を保っていた。

「ハマーン……もう一つだけお願いがあるんだけど……いい？」

「ええ……別に構わないけど……」

話の展開と、シヤアの妹故に大体予想が付いた。

「無理にとはいわないけど、貴方……私と身体を重ねてみない？」

私は、わざと沈黙の時間を作ってから静かに答えた。

「改まって言うからそう言うだろうとは思ったけど……私はシヤアを寝取った人間ですよ。それでも構わないのですか？」

「だからこそお願いするのよ。私は兄と肉体関係をもってしまった事を今でもずっと後悔してるといのに、貴方は一度別れたとはいえ、また寄りを戻す事が出来て……しかも兄の子供まで作って……ホント、羨ましくてしようがないわ……。そんな兄と関係を持った貴方を抱いてみたいのよね」

「お義姉さん……」

「私なんて……アムロと一緒に戦う勇氣すら無かった女よ。私は彼が辛くてどうしようも無くて、人に頼りたい時に一緒に居る事が出来なくて、いざ私が彼を頼りたくなった時には……彼には一緒に戦う女性が出来ていて……」

「……」

ハマーンは、アムロと会ったて会話をした際、彼の心がベルトーチカに向いているのを聞いていた為、何も答える事が出来なかった。

「でもね。アムロと肌を重ねる度に……兄だったら私をどう感じさせてくれるのだろうか、どんな言葉を

かけてくれるのだろうか……そんな事ばかり考えるようになっていった……。今思えば私が彼に変態的な行為を強要してしまったのは、そんな気持ちの裏返しだったのかも知れないわ……」

私は彼女の目を見ながら言った。

「辛い事は、もう話さなくてもいいから……。これから楽しく生きればいいんですし、お義姉さん程の美人なら幾らでも男なんて寄って来ます」

私の言葉に、セイラは薄笑いを浮かべた。

「ハマーン……貴方も二人と寝たのなら判るでしょうけど、あの二人以上に刺激的な愛を育む事が出来る男がいて？それに、仮にいたとしても、この気持ちを精算出来なきゃ……同じ事の繰り返しになってしまうわ。もう……そんな事嫌なの……辛いのよ……。だから、貴方に抱かれる事で全てを精算させて欲しいの。直ぐには無理かも知れないけど、そのきっかけになれば……」

「……ちよつと失礼しますね」

私は立ち上がり居間へ向かい、電話を手にするのと託児所に連絡を入れた。内容は要約すると、今晚仕事の都合があるのでハリーを一晚預かるプランに変更して欲しいという事だった。

このコロニーには、戦火を逃れてやってきて子育てをする女性が多い為、このような事は多々ある事だった。もちろんそれ自体が良いとは言えないが、生きていく為には仕方が無い事とも言えた。もつとも、今回のケースは特別なのだが、そういう環境である為、問題なく事は進んだ。

「ハリーは託児所に泊まってもらう事にしたから、会うのは明日の朝になるわよ」

応接室に戻った私は、セイラに向かってそっと耳打ちした。

「え？どういう事……」

「だって、私達の行為を……ハリーに見せる訳にはいかないですもの。ただでさえそう言う血が入ってるのにそんな行為を見せたら……シヤア以上の変態になってしまうかも。それに私を求められても困りますから……ね」

私が苦笑いをしながら言うと、セイラが心配そうに訪ねた。

「ハマーン……本当に……いいの？」

「ええ……私はシヤアのお陰で女性との行為をしても平気ですし、それにお義姉さんを抱く事でアムロを調教した人の心を感じる事が出来るかも知れないし……」

「ハマーン。貴方……兄を愛する位だからそうだと思ってたけど……やっぱり心の底から淫乱で変態な女なのね」

「それは……マゾの私には最高の褒め言葉ですよ。お義姉さん。ふふっ」

私はその場でそっと服を一枚ずつ脱いだ。上下の下着だけの姿になり、ブラを外すと左右の乳首の先にリング状のピアスが顔を出した。

それを見たセイラの表情が、妖艶な表情に変わった。

「エロティックなアクセサリを付けてるのね。それ、自分で開けたのかしら？」

「ううん。シヤアが私に……『これはお前が私の奴隷という証だ』って言って……。それ以来ずっとピアスを付けてるんです」

私は窓のカーテンを閉めた。そしてセイラの側に行き、こう告げた。

「私だけ裸になるなんて……お義姉さんも……」

「そうね……ご免なさいね」

そう言って彼女も服を脱ぎ始めた。セイラは下着も全て脱ぎ去り、全裸でソファーに横になった。

その容姿は私ですら羨ましい程美しかった。この身体を目の前で見せられてば、アムロが彼女の虜となつたとしても仕方ない事だろう。

「お義姉さんの肌……綺麗で羨ましい……」

「ふふつ。ハマーンだって生活に追われてる割には綺麗な肌をしてるじゃない？」

「そんな……お義姉さんから見ればもう……恥ずかしいわ。体の線も崩れてきてるし……」

「白い肌に擦過傷の後があちこちあるのね……」

「これは……と縄を使ってプレイしたので……お互い気を付けてたけど……仕方が無いです」

「火傷の跡とかは？」

「蠟を使う時は低温用だったし、終わったら充分に冷やしてたし……私にピアスの穴を開けた以外は、針を刺すとか、焼き印を押すとか、傷を付けるとか、入れ墨をするとか……そういう行為だけは決してやらなかったですね」

「兄は大切なものをオモチヤにするのは好きなんだけど、傷付いたり壊したりするのは嫌なのよね。でも、ハマーン。貴方……もし兄にそういう事されそうになったら……どうしてた？」

「そういう事って……？」

「そうねえ……例えばお尻に奴隷の焼き印を押されるとか、人目にさらせない卑わいな入れ墨を入れられるとか……かな？」

その言葉を聞いた瞬間、私の中の淫乱な血が騒ぎ、股間が少し濡れた。声を少し震えさせながら答えた。顔も火照っていたと思う。

「それは……もしそうだったら……シヤアがしてくれるなら……受け入れたかも……」

「凄いなあ……兄の事……本当に愛してるのねえ……」

「私の中ではそれが自然だし、今でも私は彼の忠実なメス奴隷ですから……アクシズと一緒にいた時に誓った約束は一生守る覚悟ですし……」

私が笑顔で言うと、セイラは少し悲しそうな表情で答えた。

「でも、その気持ちのまま地球圏に来て、アクシズから逃げた兄と戦ったのなら……さぞかし辛かったのではなくて？」

「えっ？……ええ……とても心が張り裂ける位辛い事だったわ。私はネオ・ジオン……いえ、あの頃はアクシズの指導者としての仮面を付けて気丈夫に行動してたから、私達を裏切ってエウーゴにいたあの人をすんなりと認める訳にはいかなかったですもの。もちろんそれは表向きの話だけ……。私はその最中でも、何回か彼に戻って欲しいというシグナルは出してたし、それを端から見ている人達にはえらく不思議な会話に聞こえた筈ですよ。だって、そういう裏事情なんて知らないんだもの」

セイラはソファアに横になりながら、私を側まで招くと、下着越しに私の股間……割れ目からクリトリスを優しくなで回し始めた。

「ハマーン、話を続けて……」

「ええ。私は……彼のモノなのに……なぜ敵対しなければならないのか……あの頃の私はずっと悩んでたわ。でも幸いにしてエウーゴが交渉をする為に私達の所へ来て……シヤアだけを交渉継続という理由で残す事に成功して……あんっ！」

クリトリスを軽くつままれた私は、思わず声を出してしまった。そんな私にセイラはこう言った。

「で？……それからどうしたの？」

「……ああっ！」

「あら？興奮してちや判らないわ。あら？貴方の中からこんなものが出てきたわよ」

セイラは私の割れ目に沿って下着を上下に撫で、あそこから出てくる愛液を手付けて、私のへそ辺りにぬぐった。

「いやらしい子ね……」

セイラは再び私の股間を優しく障り始めた。私は高鳴る快樂の中で更に話を続けた。

「私は……その時も彼に色々調教して貰って……グリップス戦の後もしばらく匿っていて、その間もハードな行為をしまくりの日々で……そしてお互いの心の中を深く確認しました。それで、お互い納得ずくの上で別れたのですが、私がジユドーとの戦闘で傷付いた時に彼が助けてくれて……そして子供を授かってここへ移り住んだ……」

そう話してる間に、セイラは私のショーツを脱がせ始めた。素直に従う私。

「貴方のショーツよ。ここがこんなに嫌らしい液で濡れてるわ」

その部分を興奮した表情で舐めるセイラ。

「そんな所舐めちゃ……汚いです……」

「汚くなんて無いわ。とっってもおいしいわよ」

彼女はゆっくりと立ち上がり、私をそっと抱き締めて唇を重ねた。

「ん……んっ」

舌と舌を絡め合わせるペチャペチャと粘っこいような音が部屋に響き渡った。どの位そうしていただろうか、やがて私の方から言った。

「続きはシャワーを浴びながらにしたいのですが……」

「いいわよ。じゃ、今度は私がネコ役でいいかしら？」

「はい。私はどちらの役も出来ますし……構わないです」

「ふふっ、じゃ、行きましょ」

「はい」

私はそう答えると、セイラと共にシャワー室へと向かった。私達がいた部屋にはアルコールと、女性の発情した匂いが充滿してたと思う。

*

*

*

「お義姉さん……好き……」

シャワーが降り注ぐ下で、私はセイラの後ろから抱き付く様な格好で唇を奪い、彼女の全身をまさぐっていた。

「上手なのね。ハマーン。もう全身が溶けちゃいそう……あんっ！」

「それは……全てシヤアに仕込まれたお陰よ……お義姉さん」

「ハマーン……」

「あっ……痛かったかしら？ゴメン」

「ううん。こうやって楽しんでる間は、『お義姉さん』じゃ無くて『セイラ』って名前で呼んで欲しいの。それとタチ役なんだからもつと命令口調でいいのよ？あ、私が命令口調になったらいけないわね」

「判りました……いえ、判った。では、これからはネオ・ジオンで指揮を行っていた時の口調でプレイするが……これでいいのか？セイラ？」

「はい。お願いします……」

少し妙な気持ちだったが、私はセイラが納得するならそれで構わないと思った。

彼女の全身をくまなく触り、性感を充分に高めておいてから、ゆっくりと胸や下半身をまさぐった。すると、余程気持ち良かったのか彼女は軽く絶頂を迎えて、シャワー室の床にペタリと座り込んだ。

「どうした？お前はこれ位で根を上げる女なのか？」

「いえ、もっともつと激しくお願いします。私の頭が空っぽになってリセットがかかる位に……」

私は一旦間を置いて言った。

「本当にいいのか？言っておくがシヤアに調教を受けた私の責めはかなり辛いぞ。その覚悟が無ければここで止める事を進めるが……」

「堕ちる所まで堕ちなければ、はい上がる事も出来ない……それを一番良く判ってるのはハマーン……」

いや、ハマーン様、貴方ではなくて？」

セイラは床に座りながら上目遣いに私を見た。

私はセイラの決心をくみ取ると、シャワーを止めて彼女をそのままにして一旦そこを出た。そして洗面台の下から、小型の容器に入った浣腸液を二個手に取ると再びシャワー室へ戻った。それを見るなり、セイラの表情が微妙に引きつるのが判った。

「これから何をするか……判るな？」

「はい……」

セイラは四つん這いになってお尻を私の方に向けた。

「ハマーン様。いやらしい私のお尻に、どうかその浣腸液を入れて下さいませ」

「ふっ、自分からおねだりをするとはな……お前も本当に変態だな」

「はい。私は淫乱で変態です。ハマーン様……」

容器の蓋を取り、アヌスの粘膜が傷付かないように念入りに唾液で濡らした後、セイラのアヌスに一個、更にもう一個注入した。

彼女のアヌスをみていると、最初は普通だったのが徐々に排泄を押さえようと、キュツとなってくるのが可愛らしかった。

やがて、セイラの声が荒くなってきた。

「はあ……ああっ……ううっ！いたっ！痛い！痛い！」

「声を出すとは……まだ入れてから一分も経ってないのだぞ！私などはお前の兄に最低三十分は放置さ

せられて、その都度排泄を必死に我慢していたんだぞ。漏らすとそれを……塗られたりしてな……」

「はい。申し訳ありません。ハマーン様」

「まあ、今日は特別に十分我慢するだけで許してあげるとするよ。だがいいか?!もしそれ以前に漏らしなんかしたら、今晚のお前の食事は自分のそれだからな!もつとも、それが好きだというなら、あえて止めはせんがな……存分に食べる分だけ排泄するがいいさ。ふふふっ」

私の言葉に、セイラは驚きと恐怖心を覚えたと思う。演技は真剣な程盛り上がるのだ。

もつとも彼女自身、今のシヤアは知らない訳であるから、私達が付き合っていた頃のプレイ内容など知る筈も無かった。

私は更に話を続けた。彼女の精神を徹底的に責めて、奈落の底へ墮とす為……。

「お前……先程私とプレイしたいと言っていたが、本当は今でもシヤア……いやお前にとってはキャスバルだったな……そのキャスバル兄さんとセックスしたいと思ってるのではないのか?」

「そんな……そんな事……」

「お前に一つ教えてやろう。私とシヤアが一緒にいた頃、私が髪型をお前のようにした日、身体を重ねたシヤアの興奮は半端なものでは無かったんだよ。私はずっとその髪型がシヤアの好みだとばかり思っていたが、お前の話を聞いて、あの時シヤアはお前を連想して興奮してたんだと判ったよ。まったく……変態だよお前達兄妹は……」

私がそう言い放つと、苦しさを必死に我慢していたセイラの表情が一瞬陶醉した表情に変化をしたのを見逃さなかった。

私は彼女の顎を指でクイツと上げると、険しい表情をしながら更にこう言い放った。

「自分に素直になるんだな。セイラ。もう一度聞く。お前は今でも兄とセックスしたいと思っているのだろうか？」

「あ……あ……」

それを言ってしまったら、理性が崩壊してして堕ちる所まで堕ちてしまいそうなので、必死にこらえているのが判る。

私も経験がある事なので、その気持ちは痛い程判るが容赦する事は一切無かった。

彼女に軽く平手打ちをした。

「いいか、お前達が勝手にお互いを好きになって、勝手にセックスして、その結果取り返しが付かない事態になったとしても、それはそれでいいだろうさ。だが、お前の兄は、お前への気持ちを強く残したままラアアやら私やらと深い関係になって、相手の心を弄んで来たのだぞ！私もそんな男など捨て去れば良いのだが、残念ながら『永遠の奴隷』の誓約をしてしまったからな。この胸の苦しい思いをこれから一生引きずりながら生きなければならんだ。判るか！お前に!？」

「……申し訳ありません！ハマーン様！」

「なら、本音を全て話してみるがいい！」

「はい……。私は……本当は今でもキャスバル兄さんとセックスしたいと思ってます！今でも兄さんの事がとても好きで忘れられないんです！私の中に兄さんのミルクを思いっきり受け入れたいんです！」
「それをシヤアに言う事が出来ない代わりに、私に抱かれる事でその気持ちを補おうとしたんだろう？」

「はい……。兄から調教し尽くされたハマーン様なら、きっと私の気持ちを昇華させて下さると思います」

「なら、ハリーに会いたいというのはついでで、本当は私に抱かれる為に来たという訳だな？」

「はい」

「はん。私の義姉がこんな恥知らずで変態な淫乱女だったとはな…本当に失望したよ」

「ああっ…申し訳ありません」

セイラはその場に泣き崩れながら更に話を続けた。

「そのお気持ち、私を責める事で癒しされるのでしたら思う存分責めて下さいませ。今の私にはそれ位しか……ううっ」

その言葉を聞き、そろそろ精神的にも肉体的にも潮時だと察した私は、彼女の頭をそっと撫でながら言った。

「ふふ……そう言ってくれると嬉しいよ。セイラ。では褒美として、その浣腸の苦しみ…自分を慰める事で紛らわすがいい」

「あ…ありがとうございます…くっ！」

膝建ちのポーズになり、右手は自分の股間をまさぐり、左手は排泄しようとするアヌスを押さえながら、セイラは身体をくねらせて快樂の中へ浸っていた。時折強烈な排泄感が襲ってくるらしく、手が止まったりしたが、それでも何とか彼女は約束の十分は我慢する事が出来た。

私は彼女の前に行くと、足を広げて彼女に向かって放尿するポーズを取った。

「時間だな。では我慢したご褒美だよ」

「はい…ありがとうございます」

オシッコは最初チョロチョロと出ていたが、やがて勢い良くセイラの口の中へ注がれた。彼女は必死にそれを飲んでいたが、飲みきれずに溢れ出たオシッコが、喉元をつたい、胸の回りを流れ落ちていった。

放尿が終わると、私はセイラに優しくキスをしながらこう囁いた。

「さあ、一回昇天したらここで出して良いよ……。ただし、イク時はお前の兄…：キャスバルの事を想いながら果てなさい」

「に…：兄さんの事を…：ですか？」

「そうだ。私に遠慮する事は無いし、お前の心の中にずっと溜めているモノを吐き出して気持ちの整理を付けるんだな。さあ、お前のいやらしい姿を、存分に私に見せるがいい！」

「はい、ありがとうございます…：ああ…：」

セイラは股間を激しくこねくり回して身体を左右に揺らしながら、徐々に快楽の階段を昇っていった。

「兄さん！キャスバル兄さん！好きっ！とっても大好き！…：あんっ！兄さんにまた抱かれない…：愛してるって言いたい！兄さんの…：ペニスをもう一度出いいから受け入れたい！私はこんなにも良い女になったのよって…：私の全てを見せたたいの！私の全てを感じて欲しいの！でも…：ううっ…：でもそんな事言えないから…：！兄さん！！ずっと、ずっと好き！！好きいいいい！」

やがて小刻みに震えだしたかと思うと、上を向きながら目をつむって叫んだ。

「あっ……ああ……イクウウウウウ！」

私はその瞬間、彼女をしっかりと炊きしめた。セイラの手に入力が入る。絶頂を迎えると共に、下半身からは最初茶色の液体が飛び出し、やがて固形物が勢い良く吹き出した。

余程気持ち良かったのだろう。長い時間絶頂間を迎えていたた彼女は、頭をガクンと下げて、激しい息づかいをしていた。時折苦しそうな表情をしたかと思うと、アヌスから断続的に排泄物が垂れ流された。

シャワー室にはセイラの排泄物による悪臭が立ち込めていたが、興奮している私達には、それすら刺激材料にしかならなかった。

「セイラ。足下を見てごらん。お前の身体から出たものが沢山溢れてるぞ」

「ああ……私はイク瞬間と、排泄する瞬間をハマーン様に見られたのですね……とつても恥ずかしいです」

「でも、お前はそれを見て欲しかったんだろう？」

「はい……」

「シャア……いや、キャスバルとのセックス願望を今でも持っているとう事も、誰かに言いたくて、でも言えなくて心の奥に長く封印していた……辛かったのではないか？」

「はい。その通りです。今はそれを言う事が出来たお陰で、やつと心の靄が晴れた感じです」

「だがその代償として、お前は私と同じ位の淫乱で変態なメス犬だという事がばれてしまった訳だが……それで良かったのか？」

「はい。ハマーン様はそんな私はお嫌いなのですか？」

「そんな事はない。むしろ義妹である私に、誰にも言えない秘密を告白してくれた事が……とても嬉しい」

「ハマーン様……」

私達はそのまますぐお互いの身体をまさぐり合っていたが、快楽に夢中だった為、排泄物の上である事をすっかり忘れていた。二人で床に座ろうとした際、うっかりそれをお尻で潰してしまった。

それはグニュっという粘土のような感触だった。

「あ……」

「すみません。すぐ流します」

セイラが慌ててシャワーの栓を開けようとしたが、私はそれを手で止めた。

不思議に思っている彼女に対して、私は彼女の……を握ると、そのまま彼女背中に塗りつけてしまった。一旦その様な事をしてしまうと、もう止まらなかつた。みるみる二人の体が黄金色に染まっていく。

「ハマーン様……何を……！」

「折角出したのが残っているのだし、お互い堕ちる所まで堕ちましょうよ……お義姉さん。ああ……」

「……ええ……判ったわ……あああああ……」

異常な興奮状態の私達が、この後シャワー室でどんなプレイをしたかは、二人だけの秘密である。

*

*

*

その後、私達は場所をベッドに移し、夜通しお互いの身体をまさぐりながら、何度も、何度も絶頂を

迎えた。ある時は私が攻め、またある時はセイラが攻めと、役割を変えながら、時には優しく、そして時には道具を使つて厳しく、お互いの体力の続く限りプレイが続けられた。

やがて、私がペニバン付きの下着を履いてセイラを昇天させた時、長く続いたプレイもやつと終わりを告げた。

空が明るくなってきた頃であつた。

「ハマーン……起きてる？」

「はい」

「けっこう疲れたでしょ？ありがとうございますね」

「そんな事ないわ。……義妹として当然の事をしたまでだし……」

「ふふっ。そう言ってくれると気が楽になるわ。だって、兄を心から愛している貴方の元へ、兄の実際の妹が、兄に抱かれないと思つて告白に来るなんて……冷静に考えれば信じられない話だものね」

「それに私に抱かれる事で、間接的にシヤアに抱かれる事を連想して感じてるだなんて……私以外の人だったらそんな事許せないと思うかも……」

「そうね……。でも、私は兄をとつても愛している貴方だからこそ……こうやつてお願いしに来たのよ」
その言葉に、私の心が少し高鳴つた。彼女は更に話を続けた。

「でも、やつと自分の心の中で整理出来たから……本当に助かるわ……」
そう言うセイラの表情は、とても安らいでいた。

「私……お義姉さんが来てくれて……人に言えない事を私に話してくれて良かったと思ってるわよ」
「どうして？」

「だって、私がこんなに淫乱で変態なのに、お義姉さんが潔癖で完璧なお嬢様だったらどうしようかと思ってたんだもの……」

「ふふっ。貴方と同じ淫乱で変態な女だって判って安心した？」

「ええ。あつ、でも軽蔑なんか決してしてないし、今でも私にとってでも尊敬するお義姉さんだわ。それに、私もお義姉さんとプレイする事で、アムロが受けた内容を知る事が出来たから……」

「私の責め……辛かった？」

「シヤアの責めに比べればまだまだ……でも、普通の人はあの責めは嫌がるかもね」

「実はね……アムロも一回だけ嫌がってホワイトベースから逃げた事があるのよ」

「アムロが……？」

「ええ。でも結局戻って来る事になって……逃げたのはいいんだけど、もう普通の生活には我慢出来ない身体になってたみたいで戻って来たのよね。それからもう、吹っ切れたように身体を求めてきたし、私もこれ幸いとばかりにプレイをエスカレートさせたけどね。ふふっ……楽しかったなあ……」

「お義姉さんも罪な人ね……」

「でも、それは相手がアムロだからなのよね……。今思えば終戦の時、すぐアムロと結婚すれば良かったかなあ……。それが私の唯一の後悔……」

「そんな機会があつたの？お義姉さん……」

「ちよつと……ね」

セイラはニコツと笑うと、再び私の胸や股間を触り、再びキスを求めてきた。どうやら今日はハリーを迎えに行くまで一睡も出来そうに無さそうだ。

*

*

*

エピローグ

私とセイラのプレイは、結局ハリーを迎えに行く寸前まで続けられた。

彼女を乗せて託児所に行くと、ハリーはセイラを見た瞬間「昔のお母さんのような髪型してる！」と言った。

どうやらハリーは自宅の書斎に飾ってあるシヤアとデートをした時の写真を思い出して言ったらしい。それを聞いた私とセイラは思わず笑ってしまったが、ハリーは何故笑っていたのか判らなかつた事だろう。

*

*

*

宙港へ向かう間、セイラはハリーと本当に楽しく遊んでいた。私はそれを横目で見つつ、ゆっくりと車を走らせていた。空は相変わらずの風景であり、今日は反対側の街並みがよく見えた。ラジオでは、昼に一時間程雨の予報が流れていた。

やがて、宙港へ着き、待合室でしばらく談笑して、いざお別れの時間になろうとした時、セイラが私の耳元でそつと囁いた。

「実は私、兄にも貴方にも言っていない事があるのよね。私、一年戦争が終わってからすぐに軍籍を抜け

て誰とも連絡を取らなかったんだけど……ね……」

彼女は一呼吸置いて話を続けた。

「宇宙へ出た辺りから生理の周期がおかしくなっちゃって、その……『これ』になっちゃったのよね」
手でお腹辺りを妊娠した感じになぞった。

「えっ！？ええっ！」

「あつ、みんなには内緒よ。兄さんやアムロはもとより、ホワイトベースの仲間にだって言っていないだから」

「お義姉さんがそう言うなら……。で、その子供の父親は……やっぱり……アムロなんですか？」

私の言葉にセイラは、笑顔を見せて首をそつと縦に振った。

「ええ、アムロとの子よ。私に似た女の子だけど内気な性格が彼そっくりなの……。名前はソニアって名付けたわ」

「アムロはその事……」

「私に子供が出来た事なんて知らないし、私だって彼に言っていないから……というか、言えなかったわね。まあ、言う機会を逸したという方が正解だけ……」

「でも……子供の為にも……」

「そうね……ホントそうよね……そろそろ考えてみる時期かしら……ね」

セイラには本当に驚かされる事ばかりだった。だがそんなセイラを、私は今まで以上に尊敬していた。

「お義姉さん。このコロニーにはワトソンというアムロと連絡が取れる人が住んでるわ。会う時はその

人を通して連絡を取って、私の家を使って使いましょうよ。私もアムロには色々とお礼をしたいし……」
「ふくん。とか言ってるけど、本音はアムロの身体が恋しいんじゃないの？」

私はドキッとして顔を赤らめた。本音を言えばその気持ちも確かにあるのだ。セイラは更に話を続けた。

「やっぱりねえ。じゃあその時は、二人でたっぷりとアムロのお相手してあげましょうよ……ねっ？」
「えっ？」

私の驚いた顔を見て、『冗談よ』とばかりに笑顔で肩をポンポンと叩くセイラだった。それを見て私は少し嫌味を交えながら言ってみた。

「お義姉さんの顔を見てると一体どこが不幸なのかって思えるわ？」
セイラは惚けたような表情で答えた。

「あら、私は思いを引きずって辛いとは言ったけど、不幸だとは言って無くてよ。ハマーン」
「えっ……？」

「私は兄への気持ちを吹っ切りに来ただけなんですもの。あと、兄を心から愛してるという貴方と肌を重ねたかったのと、兄と貴方との子供を見たかった。それだけよ……」

そう言いながら、笑顔を見せるセイラを私はとても羨ましく思った。

「……お義姉さんって、見かけによらず芯が強いのね……」

「ええ、そうよ。だって強くなければ世の中なんて渡っていけないくてよ。貴方は逆みただけ……」
「私は、そういう生き方が性に合わなくて……」

「それはそれでいいのよ。ハマーン。それに、もう貴方は戦わなくてもいいのだから、もっともっと幸せになりなさい。ハリーの為にも……」

「はい…そうします……。お義姉さん……来てくれて、本当に……ありがとう……」

私はそう答えると、嬉しさの為か少し涙ぐんでしまった。セイラは無言のままハンカチを取りだしてそっと私の涙を拭いてくれた。この光景を回りにいた人はどう思ったのだろうか。

その後はお互い無言のまま時間だけがゆったりと流れた。やがて出航時間が迫って来た為、デッキが慌ただしくなってきた。

「じゃ、元気だね……」

「お義姉さんも……」

「ハリー。また会いに来るからね！バイバイ！」

そう言うのとセイラは笑顔で手を振りながら宇宙船へと乗り込んでいった。

*

*

*

セイラを見送った私は、ハリーを助手席に乗せると、宙港を出て自宅へと車を走らせた。

「昨日はゴメンね。急に予定変更しちゃって……」

「へーきだよ。お母さん！」

「帰ったら朝ご飯食べようね。そうだ、お母さんがフレンチトースト作ってあげるね」

それを聞いた途端、とても嬉しそうにはしゃぐハリーだった。

私の人生を振り返れば、私にこんな幸せな時間が訪れるとは……今まで想像すら出来なかった。それ

故に、これからはこの時間を大切に生きていこうと思っている。

私を助けてくれたシヤアと、私とシヤアの子……ハリーの為にも……。

今日も、いつもと変わらない平凡な日々が始まるのだろう。でも、今はそれがとっても楽しい……。そう思いながら、私は朝の日差しの中、ゆったりと車を走らせた。

*** 静寂な宇宙 (そら) 第二部 完 ***